

# 歴史の継続性

——独逸におけるローマ文化の継続について——

三喜田熊蔵\*

(信州大学文理学部)

## I

ゲルマン民族がローマ領内に侵入してローマ人の手から政権を奪い、ゲルマンの主権の下にゲルマン・ローマ混合国家を樹立した時からカロリinger朝の成立に至るまでの三百年は西欧の歴史においても最も暗黒な時代の一である。ローマ文化はゲルマン民族の手によつて完全に破壊せられ、その廢墟の上に中世の文化が建設せられたと一般に信ぜられて居る。殊に Rhein 及び Limes 地方から Donau 流域地方に至る独逸におけるローマ施設は完全に破壊せられ、ローマ人は凡て南方へ連れ去られた。カロリinger時代から徐々に文化が復興し十二、三世紀頃から中世都市が新に興起して来たというのが通説である。即ち五世紀から八世紀に至る三百年は西欧史における一の深淵である。

Alfons Dopsch 教授はその著 *Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung* において、ローマ文化はゲルマン族の侵入によつて完全に破壊されたのではなく、破壊されたのはローマの政権であつて経済、技術等の文化方面においてはローマ文化は継承せられたことを考古学的発掘、地名、伝承等によつて立証し三百年間の深淵に加橋せんとした。Dopsch 教授の高説には敬服に値する点多々あり、又歴史の継続を説かれた点何人もこれに反対は出来ないものである。然し彼が歴史の継続の証明として挙げたのは主として居住 (Besiedelung) の継続であり、ゲルマンの主権の下にローマ人とゲルマン人とが協力して居住した事実であつた。ゲルマン族によつて破壊せられたローマの都市がただその居住者を根絶しなかつた事を説明しただけであつて都市生活の機能の継続にはふれていない。私は古代の都市生活に関する限り、ローマ都市の破壊と中世都市の興起までの間には矢張り深淵が横たわつて居るが、歴史の継続性から見ればこの深淵そのものが同時に歴史的継続であつて、ここに敢て加稿を必要しないと信ずる。以下 Dopsch 教授の説を紹介しそれに対して私見を述べてみたいと思う。

## II

考古学的研究による発展の継続の証明として Dopsch 教授はまず Hessen 地方殊に Main 河流域地方をとりあげ、Georg Wolff, "Die Bevölkerung des rechtsrheinischen Germaniens nach dem Untergang der Römerherrschaft" に拠つて Alemannen 或は Chatten が三世紀以後 Main 流域へ侵入して来た時、元住民のうち裕福なる階級は田畑、家屋を撰取せられ、追放の厄に会つたかも知れぬが、貧困なる人々は自由意

\* 信州大学教授

志によるか又は強制的にか多く元の居住地に留まつたと思われる。それはローマ人の使用した貨幣、器具の発見、殊に現在の耕地の通路、村道、家並みがローマの Lagerdörfer (canabae) のそれと一致することによつて立証せられる。又ローマの Lagerdörfer (castelle 附近にあつて要塞へ物資を供給した設営村落) 地域は皇帝領 (Domanialgut) であつた。侵入した Alemannen が撰収したのはこの皇帝領で、個人の所有地ではなかつた。又 Franken が続いてこの地方に侵入した時 Chlodwig が撰収したのも Alemannen の Herzog の領土で個人の所領ではなかつた。このローマの皇帝領 (Domäne) の一例として Dopsch は現在の Rottenburg 地方に当る Sultus (Domäne) Sumerocena をあげている。然しこの Sumerocena 地方はローマの末期においては小世帯の小作人に貸与せられて居り、この地方が civitas に包含せられてからはその借地権は一層強化せられて居たから、ゲルマーネンの Herzogen 或は Führer によつてこの地方が撰収せられたことによつて個人の所有権が侵害せられなかつたと云う論は割引して考えねばならないと思う。

Dopsch 教授は K. Schumacher, Zur Besiedelungsgechichte des rechtsrheinischen Rheintales zwischen Basel und Mainz に拠つて、Rhein 平原地帯は前史時代からよく耕作せられた人類の居住地であつて、この地方が Rome 人によつて支配せられ、ローマが Limes 地帯を放棄して、Alemannen, Franken がこの地方に侵入した後も、この Alemannen や Franken の主権の下にローマ人とゲルマーネン人とが融和的に共存したと述べて居る。然し Dopsch のあげて居るのは Rhein 平原地域に於ける人類居住 (Besiedelung) の継続であつて、この地の都市的生活の存続には触れて居ないのである。

### III

Dopsch 教授は、更に Rhein から Donau 流域における多数の都市について考古学的立場からその発展の継続を論証して居られる。私はそのうちから Köln, Mainz, Frankfurt am Main, Worms, Trier, Metz, Augsburg について彼の所論を紹介して併せて私見を述べてみたいと思う。

まずローマ時代に Colonia Agrippina と言われた Köln の 355 A. D. の破壊について古代末期の歴史家 Ammianus Marcellinus (330—400 A. D.) は、“Secunda Germania” に於ける有名なる都市 Colonia Agrippina は頑強なる包囲の後破壊せられ住民は多く根絶せられた (Ammian. XV. 8, 19: “Coloniam Agrippinam, ampli nominis urbem in secunda Germania, pertinaci barbarorum obsidione reserata magis viribus et deletam.”) と報告して居る。

然るにこの同じ Ammian はその翌年の 356 年、後にローマ皇帝となつた Julian (361—366) が軍隊を率いて Köln の町に入り暫くそこに滞在して、この最も防備ある町を占領したのはローマにとつて将来役立つであろう (rei publicae interim profuturam et urbem reciperet munitissimam) と云つたと記述して居る。又 Gregor von Tours (540

—594) は、六世紀の終りにおいて、Köln の教会は金色燦然たるモザイクの装飾を持つて居ると報告して居る。これによつて Dopsch は Ammian の Köln が破壊根絶 (delese) せられたと言うのは虚偽の報告であり、最も防備ある (munitissima) 町として存続して居たのであると主張して居る。然し私は同一の著者が同一の書物で真実と虚偽の報告を同時にするはずが無い。破壊せられたのは都市的生命が絶たれた事を意味し、その後は防備はあつたにせよ人類の単なる居住 (Besiedelung) として存続したに過ぎないと思う。

次にローマ時代に maguntiacum と云われた、Mainz についても Dopsch はローマ文化と初期ゲルマン文化との関連を次の様に述べて居る (Grundlagen, i, 158ff)。五世紀の著述家 Salvian v. Marseille (c. 400—c. 490 A. D.) はこの町は破壊され消滅した (excisa et deleta) と述べて居るが、それより百年後の詩人 Venatius Fortunatus (530—609) は Mainz には修繕を必要とする教会があると云い、又 Karolinger 時代に建てられたる教会の土台には初期キリスト教時代の墓石が沢山使用せられているのが発見せられた。これは初期キリスト教時代の教会建築と死者崇拜との関連を示すと同時に民族大移動の強風怒濤に拘らず人類の居住が継続したことを示すものである (Fortbestand der Besiedelung)。又最近の 1907年 1908年の Mainz の考古学的発掘において墓石が沢山発見された。その刻名は年代を追うて先ずローマ人名が多く、次には Keltoromanisch が多く更に römisch=Germanisch となり、最後のものは fränkisch 人名が多くなつて居る。これは民族大移動によつてローマ的社会からゲルマン的社会へと移り、六、七世紀に於いてもゲルマンの政治的主権の下にローマ人とゲルマン人が同じくキリスト教信者として交友的に共存したことを物語るものであると云つて居る。然し Dopsch の証明したのは人類の Besiedelung の継続であつて古代都市としては Salvian von Marseille の言つた如くに破壊され滅亡 (excisa et deleta) してその生命を絶たれたものであると思う。

Frankfurt a. M. について、Dopsch 教授は以前この地方は沼沢地で Frank 時代にこの町は新に建設せられたと信ぜられて居た。然るに考古学的発掘の結果その市街地からローマ時代の遺物が多く発見せられた。又ドームのある岡 (Domhügel) からは Kaiser Domitian (81—96) が、83年84年の Chattenkrieg の時に建設した要塞 (Kastella) とその附近の設営村落 (Lagerdorf) が発見せられた。又ドームのある岡 (Domhügel) へ輻合している道路はローマ時代に Taunus, Hedderheim (Nida), Wetterau から、この Kastella へ通して居た軍用道路の一部であることが明かにせられた。それでこの Frankfurt a. M. に於ても居住の継続 (Fortdauer der Besiedelung) が認められる (Grundlagen, i, 160—161)。即ちここでも Dopsch は Besiedelung の継続を論証したのに過ぎないのである。

Worms に関して Dopsch 教授は、この町は 409年の Vandalen による長い包囲の後破壊せられ根絶されたと古文書が記して居る (Vangiones longa obsidione delati (Hieronymi epist.)) が、これは完全な破壊でない。その証拠には Worms は 413—436年迄ヴルグンド王国 (Burgundisches Königsreich) の首府となつて居る。又最近

ローマ時代の墓に接近して Merowinger 時代の墓地が発見せられた。又 Worms にはローマの道路が二筋も南北を貫く幹線道路として残つて居る。又町の小高いドームの丘 (Domplatz) においては Merowinger 時代の建物が発見せられた。又 Worms には Karolinger 時代に王の居城があつて、Pipin も Charlemagne も屢々ここに滞在した。又 Charlemagne は Fastrada との結婚をこの Worms で挙式したと伝えられる。これらは皆 Worms における居住の継続を示すものであると云つて居る。即ち Burgunder の首府となつたり Charlemagne の居城が置かれたとしてもそれだけでは都市が存続した証明にはならない。単なる Besiedelung の継続である。

Trier に関して Salvian von Marseille は、神の恵みについて (De Gubernatione Dei, VI, 13) において、ガリアにおける最も富める町、Trier は全く破壊せられ焼かれて亡び、市民は捕えられ連れ去られ殺されて悲しむ (Urbs Gallorum Opulentissima, excidium civitatis, rerum ruina plebi captivae et interemptae, quae aut periit aut luget.) と云つて居る。然るに Trier を支配した Frank 族の Gaf Arbogast に対して、そのキリスト教的統治を賞讃して Salvian と殆ど同時代の詩人である Bischof Apollinaris Sidonius は、古代の支配者の如く言葉と剣とを以て統治する (Par ducibus antiquis lingua manuque) と云つて居る。又この Arbogast に対しては同時代の Bischof Auspicius von Toul が“賢き子よ!” (fili sapiens) と賞讃して居る。Dopsch 教授はこれは Trier を統治したキリスト教化せられた Frank 族の Arbogast を賞揚した言葉で、Trier 町は依然として存続したことを示すものであると主張した。更に Dopsch 教授は E. Krüger, Trier, der Arenakeller des Amphitheaters. に拠つて、1905年 Trier の考古学的発掘によつて円形劇場の穴蔵から発見せられた四世紀頃の製作にかかる象牙の脚のある Pynix (聖ホステアを盛る器) は、この穴蔵がローマ時代以後においてキリスト教の目的のために使用せられたことを立証するもので、Salvian の Trier の全く破壊されて亡びたと云う報道は誤りで、Besiedelung の継続が立証せられると主張している。即ち Salvian は破壊を伝え Apollinaris はこの地の統治者を讃美するこの矛盾に際して Dopsch 教授は前者を否定して後者を是認されるのであるが、私は Salvian は古代都市としての Trier の滅亡を告げ Apollinaris は荘園的統治者としての Arbogast を賞讃したものとして矛盾せる記述のうちに統一を求めたいのである。

Lothringen の首府 Metz に関して、Gregor von Tours (540—594) は 451年の Attila の攻撃によつて此の町は焼かれ、人民は殺され、聖 Stefan の礼拝堂の外は何物も残されなかつたと報告して居るのに対して、詩人 Venantius Fortunatus (530—609) は Clodwig の長子 Theoderich (511—533) が居城を構えたこの Metz の町を美しい都市として描き、自らその城壁を見たとき報告して居る。又 Dopsch 教授は G. Wolfram, Die räumliche Ausdehnung von Metz zu römischer und frühmittelalterlicher Zeit. に拠つて、Metz の街路の整然たる並び方は、ローマの道路によつて居ること、又 1897年、1898年に行われた考古学的発掘によつて、ローマ時代の円形劇場がキリスト教時代に於ても使用せられて居たことが立証せられたことによつ

て、Gregor von Tours の報告は誤りであつて、Metz に於ける発展の継続が立証せられると主張して居る。私はこの Metz に関しても Gregor von Tours の報告を生かし451年の Attila の攻撃によつて Metz の町は都市としての生命を絶たれ其後は居住の継続を示すのみであると考え。

ローマ時代に Argentratum と呼ばれた Strassburg に関して Dopsch 教授は、406年 Vandalen によつてこの町は破壊されたと伝えられるがそれは完全なる破壊でない。18世紀にこの Strassburg のミカエルの丘 (Michaelsbühl) で発掘せられた瓦には “Arboastis episcopus ficet” という刻銘文がある。これは六世紀の末にこの地で活動した、Franken 人で Bischof となつた Arbogast の在任を証明するものであつて、この Strassburg のローマ的の町から初期キリスト教的ゲルマン的町へと推移したことを示すものである。更に Dopsch 教授は、Johann Ficker, Denkmäler der elsässischen Allertumssammlung. に拠つて、ローマ時代の市街地から発掘せられた民族大移動時代、初期キリスト教時代、Merowinger 時代、Karolinger 時代の遺物によつて、ローマ時代の城壁のうちにローマ以後の文化が生き残り、ローマ人とアレマン人が隣人として交友的に生活したことを物語るものであると云つて居る。Dopsch はここでも人類居住の継続を立証したのである。

Raetia Secunda における重要都市 Augsburg は古代における隣接せるゲルマン族、殊に Hermunduri 族との交易の場として知られて居た。Dopsch はこの都市が Alemannen によつて完全に破壊されたと言うのは信ずるに足らない。寧ろ Alemannen はこの地に残存したローマ人と交友的に平和裡に居住したと云つて居る。Theoderich (455—526) は Raetia を Italy の前衛地として防備した。

A. Hauck, Kirchengeschichte Deutschlands に依ると、Augsburg のキリスト教会は Konstantin 大帝以前に起原を發し、Alemannen の侵略にも堪え、その性格を römisch から deutsche へ変貌して行つた。又 Augsburg の周辺より発掘せられた Alemannen の東向に一列に並んだ墓 (Reihengräber) の所在によつて、Alemannen は良き耕作者であり、肥沃の粘土地帯に居住したことが明かにせられた。更にかの有名な Augsburg の Dom の青銅の扉は多分 Theoderich 自ら製作せしめたものと想像せられ Ravenna の美術の系統をひき、後期ローマの芸術に直結してローマ的生活の残存を偲ばしむるものであると述べて居る。

以上は Dopsch 教授が主として考古学的根拠により独逸におけるローマ都市のローマ政權滅亡後に於ける存続を証明し、ローマの末期より Karoliger 時代の三百年の深淵に架せんとした橋梁の要旨である。彼は Köln の町に関して Ammian がこの町の破壊と滅亡 (delere, excindere) とを報えた直後に Julian がそれを最も防備ある町 (munitissima) として占領したことを報告して居るが、この矛盾に於て前者の虚偽の報告し、後者を正しき報告して信じた。又 Mainz に関しても Salvian von Marseille はこの町は破壊され消滅した (excisa et deleta) と云い、百年後の詩人 Venantius Fortunatus は Mainz に古い教会が残つて居ると云つたが、この二者のうち Salvian を誤りとし Fortunatus の言葉の通り、この町は民族大移動の狂瀾怒濤のうちを生き

のびたのであるとして居る。

Worms に関して Hieronymus の書翰は、この町が 409年の Vandalen の長き包圍によつて滅亡した (Vangiones longa obsidione delecta.) と報告して居るが、413—436年には Burgunder の首府となつたから Hieronymus の書翰は誤りであるとしている。

Trier に関して Salvian が、町は焼払われて滅び、人々は捕えられて連れ去られ死し且つ悲しむ (Urbi exustae et perditae, plebi captivae et interemptae, quae periit aut luget.) と云つたが、同じく五世紀の Apollinaris Sidonius はこの地を Frank 族出身の Graf Arbogast が統治して居ることを報告して居る。従つて Dopsch は Salvian の記述は誤りであるとして居る。

然し果して Dopsch 教授の云う如くこれらの記述は誤りを伝えたものであろうか。勿論これを文字通りに受取るとは出来ぬが、これらの古典の記述が伝えて居る破壊と滅亡は古代都市としての破壊であり、都市としての機能が停止し消滅したことを伝えるのである。Dopsch がその存続を説明したのは居住 (Besiedelung) の継続であり、人類が尙そこに存続して居ることを証明したに過ぎないのである。

都市としての存続は都市としての行政組織と社会的経済的組織の存続の証明が必要である。都市の存続には直接農業的生産にたずさわらない消費者と彼等の需用を満たす職人、商人等の存在が必要である。かかる人口を集めた中世都市の出現は比較的小さい。国王や Bischof 或は諸侯の支配下にある或る土地がこれらの支配者から Marktrecht を得て都市として興起するは第十三世紀である。Dopsch は独逸において Ptolemy の所謂 *πολις*, 或は *civitas*, 或は *Burgen* 等比較的人口の密集した人類の居住地 (Besiedelungen) の存在を証明して居るが、これらも都市的な行政的経済的組織を欠いて居たから都市とは言い難い。従つて五世紀から八世紀に至る深淵に架橋せんとする Dopsch 教授の試みは不完全である。然し私は歴史の経続はかかる深淵に架橋するを必要としないので、深淵そのものが同時に継続であると思うのである、このことに関しては後段において私見を述べる。

#### IV

Dopsch 教授は伝承によつてローマ末期とカロリinger時代に至る三百年の深淵に架橋せん為に聖セヴェリウス伝 (Vita Severini) に新しい解釈を試みた。St. Severinus は Noricum の使徒と尊称せられたる高僧である。まず Pannonia に入り、Vindobona (後の Wien) に僧院を建設し 454年に Pannonia から Noricum へ来た。彼が Noricum へ福音伝道のため入り来つた頃からこの地方は Rugier, Alemannen 等の侵入のため風雲益々急を告げ、遂に 488年には Rugier 王 Odoaker の命令によつて、凡てのローマ人は Noricum を撤退して Italy へ移された。元来この地方はゲルマン族に対するローマの前衛地でローマはこの地方を防備するためにこの地方に *Castella* を建設した。又ローマが 160—180 A. D. にわたつて Markomannen 族と戦つ

たのもこの地方を防衛するためである。然るに Rugier 族の侵略によつてこの地方は完全に German 族の手に帰しローマの文化はその命脈を断たれるに至つた。

この間の事情を Vita Severini は次の様に述べて居る。“全てのローマ人をイタリアへ移す様に命じた。凡てのローマ人は Pieria の集会所へ集められてから連れ去られた”(Universos iussit ad Italiam migrare Romanos—dum universi per comitem Pierium compellerentur exire.)

Dopsch 教授は Pallmann, Geschichte der Völkerwanderung. の論旨を引用して, Eugippius の Vita Severini は客観的でなく einseitig な観方をして居るから信用出来ないといい、その理由として彼は次の三の理由をあげて居る。

第1, Vita Severini は事件の起つた時よりも少くとも 30年以後に書かれたもので, Noricum の喪失が決定的となり, ローマ人の眼には悲惨な出来事として映じたから厭世観にとられ事件を誇張的に叙述して居る。

第2, Eugippius は Severinus の弟子であるが, 事件の発生地より遙か南に当るイタリアの Neapel に住み, 他人の口伝に基いてこれを叙述したこと。

第3, Eugippius はローマ教会内の人で完全なる第三者でない。Arianismus を信奉する Rugier 族に対しては敵意を抱いて居た。従つて聖 Severinus の事業を美化するために背景を暗黒化し事件をより悲劇的に描写した。

従つてローマ人は Eugippius の記述に拘らず尙多く Noricum 地方に残存した。Eugippius の破壊説は誤りである。その証拠に同じ Eugippius は Vita Severini のうちで前の論旨に反して次の記述を載せて居る。“間もなく Boiotri の町の市民達は Rugii 王の Feba に通商の許可を貰う様に話を進めて欲しいと聖者たる Severinus に歎願した”(Intera baetum virum cives oppidi memorati (Boiotri) suppliciter adierunt, ut pergens ad Febam Rugorum Principem mercandi licentiam postularet.) これはローマ風の人民が Noricum 地方に尙多く居残つた証拠である。更に Dopsch 教授は彼の説を裏書するために, Noricum 地方にはローマの Villa の名残を留める —ing, —weil の語尾を持つ地名や, 又ローマ風人名の Ualho から変化した—walchen という語尾を持つ Traunwalchen, Strasswalchen の如き地名が現存して居る。又 Regensburg 附近の Pförring には Vespasian 帝から Alexander Severus 帝に至る 69—235 N. chr. 時代のローマの貨幣が多く発見せられたのみならず, Kreuzlinden 地方には Konstantin 時代の貨幣も発見せられた。これは Noricum 地方にローマ風人民の居住が継続せられたのみならず, ローマ人とゲルマン人とが互に協力して生存したことを示すものであると主張して居る。

以上の論旨によつて Dopsch 教授はローマ末期と Karolinger 時代との間の三百年の間隙に架橋せんとして, Eugippius の凡てのローマ人の撤退の報告を否定し且つ同人の Noricum に居残つた住民の商取引の歎願の記事を生かして, Besiedelung の継続を立証し, 更にこれを裏書するためにローマ貨幣の発見とローマ的地名の存在を挙げたのである。

然し私は Eugippius の記事を二つ共に認めたい。Eugippius はローマ教会の人であるが、中世初期の伝道に身を献げた人として事実を曲げて St. Severinus を美化する様な人であるとは思えない。勿論凡てのローマ人が連れ去られたと言うのは文章のあやでこれを文字通り解することは出来ぬ。少数の人々が居残つたのは勿論である。又 Eugippius は Noricum から遠く離れた Neapel にあり、更に事件の発生から Vita Severini の著述までには 30 年の時が過ぎ去つて居るのも事実である。然しそれだからこそ Eugippius は聞き得た多くの人から史料を蒐集して叙述したものと思われる。彼は決して Dopsch 教授の言われる如く Pessimismus に陥つて誇大に事件を悲劇化したのではない。事実を事実として描いたまでである。即ち Rugier の侵入によつて Noricum 地方のローマの都市的行政制度は亡び去つてしまつて、あとに残つたのは人民の居住 (Besiedelung) の継続のみである。Dopsch はこの深淵に架橋せんとして Besiedelung の継続を立証したが、古代都市と中世都市の興起の間には依然として深淵が残つて居るのである。

## V

ゲルマン民族の古代ローマ文化に対する破壊説を否定し、ローマ末期と Karolinger 時代との深淵に架橋せんとする Dopsch 教授の論証は、Salzburg に関する伝承の解釈において最頂点に達した。Salzburg の破壊に関係ある文書として Dopsch は (1) Vita Severini, (2) Gesta Hrodberti, (3) Breves Notitiae, (4) Indiculus Arnonis の四つをあげて居る。このうち第 1 の Vita Severini は “Heruli 族が Joviacum を襲い町を破壊し、その住民を連れ去つた” (Vita Severini. C. 24) ことを報告して居る。古代においては Salzburg は Juvavum と呼ばれたが、一時 Joviacum と Juvavum とが混同せられ Joviacum の破壊は Salzburg の破壊を告げるものとせられた。然るに最近 Joviacum は Schlögen であつて Salzburg でないことが明にせられた。従つて Vita Severini は Salzburg に関する限り直接の関係がなくなつた。

第 2 の Gesta Hrodberti (Hrodbert 伝) は、Hrodbert Rupert の伝記である。Hrodbert Rupert は Merowinger 王家一門の出で、Bayern 人の使徒と尊称せられた聖者である。彼は Bayern の Herzog の Theodo に招かれて 696 年に Regensburg へ来た。後 Salzburg に到り此の地に Bistum を建設して住つた。彼は Bayern へ初めてキリスト教を伝えたのではなく彼によつて Bayern 地方のキリスト教は益々その基礎を固めたのである。

Gesta Hrodberti は大体八世紀の末に著作せられたと推定せられるが、Rupert に関して次の様に報告して居る。“Rupert は Herzog von Bayern の Theodo から全権を委任せられて Bayern 地方の伝道的活動を開始した。彼は Lauriacum から Wallersee の方面へ向い、この附近に、ローマ時代に Juvavum と呼ばれた土地があり、ローマ時代には美しい住家があつたが、その当時はそれらの住家の凡ては消え去つ



て森林に蔽われて居る (quo tempore Romanorum Pulchra fuissent habitacula, quae tunc temporis Omnia dilapsa et silvis fuerant obtecta) と聞いた。そこで Rupert は自らその地を実際に検踏して、その地を清めて、そこに教会を建てる権限を与えられる様に Theodo に懇願した” (Grundlagen i, 179)

次に Dopsch は第3の Breves Notitiae (小教書) は W. Levison, Die älteste Lebensbeschreibung Ruperts von Salzburg (1903) に依つて、Gesta Hrodberti に依存して居るものとして史料として重要性を欠いて居るものとして居る。

第4の Indiculus Arnonis は Salzburg の Bischof の Arno が 790年頃作製した Bayern の教会に属する教会の土地及び所有権の Catalogue である。Arno は 798年に Salzburg の初代の Archbishop となつた人で Alcuin とも親交あつた Charlemagne 周辺の碩学の一人である。Dopsch 教授は史料としてこの Indiculus Arnonis を最も高く評価して居られる。この Indiculus には Rupert の Lauriacum 地方の旅行に関しては何も記載せず、只 Salzburg の町のうちにある (infra oppidum Salzburg) 聖ペテロの Bistum の属地を算えあげ、その第一に Herzog Theodo が Rupert に与えたる、都市にして同時に要塞である (Oppidum simulque et castrum superiorem) この Salzburg を記して居るのである。

Dopsch 教授は Gesta Hrodberti とこの Indiculus Arnonis とを比較して Rupert が Salzburg へ来た時はこの地には oppidum と castrum Superius が已に存在して居たのであつて、凡ての建物が廃墟となつて森林に蔽われて居たと云うのは偽りであるとして居る。

更に Dopsch はこの Salzburg は前史時代から人類の居住地となつていて、周囲に山をめぐらす要塞の地であること、又 Salzburg の附近に岩塩の採取場たる Reichenhall のあること、又 Indiculus Arnonis には Bistum に属する賃貸小作人たる Romani の存在を記して居ること等がこの Salzburg の Besiedelung の存続を立証するものとしてあげて居る。

この Dopsch 教授の主張に対しても私は同意しかねるのである。私は Gesta Hrodberti と Indiculus Arnonis の双方共に之を認め、Hrodbert Rupert が Salzburg へ来た時は古代の都市は廃墟となり、その都市的生命は絶たれて居た。勿論そこには人類は居住して Besiedelung としての存在は続けられて居た。而もそこにはかつての oppidum と castrum superius を示す廃墟の跡が残つて居る。それで Arno はかつての oppidum で castrum superius の地であつたこの Salzburg を Herzog の Theodo が Rupert に与えてことを記して居るのである。Indiculus は土地の catalogue であるから Rupert の旅行に就て詳説しないのは当然のことである。

又 Dopsch は Breves Notitiae (小教書) は Gesta Hrodberti に依存して史料価値が少いのみならず明かに偽作 (Fälschung) であるとして居る。然し私はこれは偽作でなく且つ史料価値のあるものと思う。Breves Notitiae はその一の文章の前半に於て、“Herzog Theodo は Rupert に Bayern 領内を歩いて Bistum の所在に

適わしい土地を選ぶ全権を与えた。Rupert は多くの土地を訪ねた後 Wallersee のほとりに来りここに教会を建てんとした。然し間もなく Rupert はこの地が Bistum の所在地として不適當なることを知つた。彼は Herzog の同意を得て Juvavum へ来て、ここで多くの古い建物が瓦礫のうちに埋没して廢墟となつて居るのを見た。彼はこの土地を綺麗にしてここに Bistum の所在地たる權威にふさわしい建物をたてた”と言ひ、又後段に於ては “Rupert は Superiore castro と Juvavensis oppidi の間に (in superiore castro Sepedicti Juvavensis oppidi) 一の教会と尼僧院を建てた” と報告して居る。この文献に於て Dopsch は Salzburg には已に castrum superius と oppidum が存在して居たので、古い建物が瓦礫の間に埋つて居たと云うのは虚偽であると云つて居る (Grundlagen i, 180)。然し私は一人の僧侶が前段に於て虚偽の報告をなし後段に於て真実の報告をする様なことは無いと信ずる。Salzburg は都市としての生命を絶たれ廢墟となつて横つて居た。而してその廢墟となつて居た castrum superius と oppidum の間に Rupert は教会を尼僧院を建てたのである。Dopsch は Salzburg は Passau との Metropolitanrechte を争うために Salzburg 教会の功績を顕揚せんとしてかかる偽作をしたと云つて居るが、此の Salzburg と Passau との争いは時代が遙か後であり、Salzburg 教会はかかる偽作によつて自己の功績を示す必要はないはずである。

Dopsch はローマの末期から Karolinger に至る三百年の間隙に架橋せんとしてかかる無理な論陣をはられたのではないかと思う。

## VI

Dopsch 教授は上述せる如くローマ末期から Karolinger 時代に至る歴史の發展の継続を居住 (Besiedelung) の継続によつて説明せられた。然し私は居住の継続と都市的生命の継続とは別であると思う。三百年の深淵に架橋せんとする彼の試みは完全に成功をおさめたとは言えない。然し歴史の發展の継続を説明するためにはかかる架橋は必要であろうか。私は寧ろ深淵そのものが継続であると思う。

歴史の變化は一の継続であつて、その継続は以前のもので後のものによつて継続せられ、補充せられ、自己自身のうちに高まり行く運動として行われる。然しそれは決して同じ性質のものが繰り返されるのでなくして、極めて個性的な、制約せられたる、新しい形式が創造されて行くのである。この新しい形式は以前の形式を母胎として、以前の形式を理念的に自己のうちに包含しながら新しい個別的な形式として形成されて行くのである。

古代と中世との継続は古代都市がそのまま継続することではなく、古代都市は一度死するのである。而して中世都市は新しく生れるのである。その間には深淵 (Kluft) がある。而もこの深淵そのままが継続なのである。何故であろうか。

古代都市が破壊された。それは秋に木の葉が黄み落ちる様なものである。木葉の落ちたあとには来る春に美しい花となり葉となる芽が出来て居る。その芽はそのまま生を継

続して来るべき春を待つのである。歴史の継続もこれと似て居る。ローマの都市は死し倒れ、都市的生活は亡び去つた。然し来るべき春に花をつける芽である居住（Besiedelung）は継続する。然し新に都市が興起するまで、冬芽が寒い冬の中に生きて居る様に、深淵のなかに生き続けるのである。然しこの間隙こそ新しい生を分娩するための最も重要な胎教の時である。

而も歴史の継続を達成するために、German 族がローマ人とローマ文化を根絶しないために Caesar や Tacitus の時代から五世紀に至るまでに German 人のローマ化とローマ人のゲルマン化が行われて居る。Caesar は *Bello Gallico* II, 4 に於て“武勇に富める Belgae 人は大部分が German の血統に属するものであるが、土地の肥沃に心ひかれてずつと前から Rhein 河を渡つて Gallia へ移り、この地に先住して居た Gauls 人を駆逐して自ら Niederrhein 地方に定住するに至つた”と言ひ、又同じく *Bello Gallico* VI, 24 においては、“かつて Gallia 人は German 人より勇気があり人口も多く而も食糧に不足したから Rhein 川を越えて Germania へ植民を送つた。Gallia 族である Tectosages 人はかくて Hercynia 山脈の麓の豊饒の地を占領して植民した。”と記して居る。更に *Bello Gallico* I.28 においては“German 族に属する Helvetii 族を彼等が占領して居る Gallia の地から追いはらつて元の Germania へ帰らしめた。もしそうでなければ Germania 族は Gallia の豊饒な地に心ひかれて Rhein 河を越えて Gallia へ侵入して来るのを恐れたからである”と記して居る。かくの如く German 人と Gallia 人とは Caesar の時代から互に越境して接触して居るのである。

ローマは Caesar の当時からその滅亡の時までゲルマン人をローマ領内に誘致して或は軍役につかしめて国境を防備せしめ或は大地主の下に小作人として労働に従事せしめた。即ちゲルマン人にしてローマの軍役につける Numeri（軍隊の意）、Deditici（降伏者の意）又小作人となれる Inquilini（小作人の意）Laeti（農奴）又 Canabae に附属する Veteran（農民兵）等、皆ローマの政策に協力してローマに労働力を提供せるゲルマン人の姿である。二世紀三世紀頃より益々激しくローマ領内に侵入した Chatten, Franken, Alemannen 等のゲルマン族もローマ人が敵意を示した時の外は良くローマ人と協力をして共存関係を保つた。かくしてローマの政治的権力が滅亡する迄にはゲルマン人は良くローマの文化を認識してその長所と短所を知つて居た。ローマ政権という木葉が黄み落ちた時、ゲルマン人はその落葉から充分養分を吸収して来るべき春に開花する近代文化の芽を成長せしめて行つた。

ゲルマン民族がローマの政権を打倒してから Karolinger 朝に至るまでの三百年の間隙こそは古代文化が死滅しつつもその死から新たな生を分娩して行く過渡期である。この間隙によつて近代文化はかくも美しく開花する準備をととのえるのである。この間隙、深淵こそはそのまま発展の継続である。古代ローマの都市が没落して、中世都市が興起するまでには深淵がある。而もこの深淵に於ても居住（Besiedelung）は続いて居る。かく観ることによつて同一の著者がローマ都市の滅亡を説きながら尙居住地として存続して居ることを述べて居る矛盾を理解することが出来るのである。

更にこの間隙の三百年は Romanismus と Germanentum と Catholicismus とが融合して近代文化の方向を決定する時期である。ゲルマン族がローマ文化の理解を達成して居た頃、ローマカトリック教会は西欧に堅固たる基礎をすえ、ローマから、Irish, Anglo-Saxons 族の教化が行われ、更に Irish, Anglo-Saxon の高僧達が大陸のゲルマン族を教化し、ここに三つの文化要素は融合して世界史の方向を決定する歴史的課題が達成されるのである。

若しかりに古代都市がそのまま継続し、古代文化が一度死滅しなかつたならば、この三の要素の融合は出来ないのである。生成、衰滅、再生のリズムこそ人類を維持せんとする歴史の力の表現である。これは敢て西欧に限らない。凡ての歴史は皆この死と再生のリズムを奏でて特殊のコースを流れて居る。死して復た生くる (Sepultus est et resurrexit) ことこそ歴史的生の神秘を解く鍵である。私はこの偉大なる間隙に感激を覚ゆるものである。

### Summary

## The Continuity of History—Continuity of the Roman Culture in Germany

Kumazo MIKITA \*

(Department of History, Faculty of Liberal Arts and Science)

Alfons Dopsch attempted in his “Grundlagen der Europäischen Kultur-entwicklung” to explain his theory of historical continuity covering the gap between the decline of Roman Empire and the rise of Carolingian dynasty. He used the method of archaeology, place-names and written sources to solve the problem. But in spite of his utmost efforts, what he could explain was nothing more than the continuity of human life at Roman towns in Germany. He could not explain the continuity of municipal life. In my belief Roman municipal life was completely destroyed and there is a gap between the fall of the Roman cities and the rise of medieval cities and I would rather see the historical continuity of life in the Gap itself. And this Gap forms a transitional stage and in it was carried out the amalgamation of Romanism, Germanism and christianity. History developed with rhythm of death and resurrection. The rhythmical waves of vicissitude of death and resurrection is the essential key to the mystery of historical life.

---

\* Professor of Shinshu University